

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第179号（2021年4月）



白井啓治

（十八）季節の風景が我が心を映す

（2009年4月16日）

『桜散る宵の空に想うは君のこと』

桜の花のバツと咲いてバツと散るのをみて潔い
だとか、命の儚さだとかをつい想ってしまうよう
である。しかし、ひと夜の命のようであっても桜
の花には実をつけるのであるから実際には儚さは
ない。

藪の緑の中に鮮やかな黄色を点じる山吹の花は
「…実のひとつだになきぞかなしき」と歌に詠わ
れるように、実に儚く虚しい感じにさせられる。

山吹の黄色はすぐに散ることもなく、それこそ確
りと十分な長さに花を開いている。それこそ残す
ものもなく、何時までも咲いている未練花だと言
われれば「そうだね」と応えてしまいたいそうであ
る。

ふと思ったのであるが日本人ぐらい、自然界の時
の移ろいに、自分の心を映しみることに長けた国
民もないだろう。これは、はっきりとした四季
がもたらす風景への感化であろうと思うが、どう

なのであろうか。

風景への感化とは、解るようで解らない言葉づか
いであるが、劇団ことば座の朗読舞女優小林幸枝
さんに対して、常世の国の風景をモチーフに恋物
語の百を書いている小生にとっては、意味曖昧で
あっても重大問題である。



（絵：兼平智恵子）

霞ヶ浦を中心とその周囲を取り囲む里山に吹く風
と移ろう時の色への感化は不可欠なものである。
特に最近では、石岡市、旧八郷地区の里山の風景
からの囁きはなくてはならないものとなっている。
そろそろ里山の山桜が緑を連れて満開となって朧
に染めるが、里山が山桜に染まった時には、霞ヶ
浦の水が温み、高い上昇気流をつくって雲雀の声
が一層に高くから聞こえてくる。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 （木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

時の移ろいが四季を連れて来て、四季が色の言葉と風を連れてくる。常陸国風土記に「古の人、常世の国といへるは、蓋し疑ふらくは此の地ならむか」とあるが、前に霞ヶ浦を眺め、背に里山を抱くときこの風土記の一文が必ず聞こえてくる。今日は、ここ三年来お世話になっているギター文化館の喫茶室から、里山の絶景を眺めながら、この雑文をどう書こうかとぼんやり考えているうちに一日が終わってしまった。

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

【5 菫蒲沢・上曾・小幡地区】(2)

5.3 十三塚と小幡宿

水戸から「筑波詣で」の道(瀬戸井街道)は石岡(府中)から来る道と柿岡上宿で合流し、今の県道42号線を通って筑波山へはここから登ったようです。その筑波山への登山口にある最後の宿場がこの小幡宿だったと思われます。しかし今ではこの瀬戸井街道も忘れ去られています。筑波への参拝の街道については別途紹介するとして、この小幡にも古い家並みが残っています。また筑波山へは登らずに湯袋峠を越えて真壁町へ出る道は、先に紹介した上曾峠の道よりもっと古くからありました。ここを訪れたのは数年前の1月の雪がまだ残っている時であり、果樹園の里といわれる「十三塚」から筑波への道は通行止めとなっていました。



ここも宿場として宿屋もあったと思うが、現在のその形をそのまま残しているところは少ない。石蔵もあり、大きな家も多い。この先の十三塚は果樹団地といわれ、八郷地区一番の果樹栽培地である。またこの宿場から右に曲がれば現在の「ゆりの郷」などの日帰り温泉施設を経由して湯袋峠を越えて真壁の町に出られる。

昔ながらの家並みが残っていると、とても懐かしくホッとするのは何故なのだろう。日本の各地に知られざる家並みが多く残っている。そこには、その生活や歴史が詰まっている。そんなところにスポットを当ててみたいと数年前から考えてもいるが未だに実現していない。

ここ小幡宿には、石岡の特産品として水車製法でつくる「杉線香」や「弓の矢」の製造など昔からの伝統を受け継いでいるところがある。これらを紹介しておきましょう。

▲水車杉線香

この昔からの小幡村は、かなり古く江戸後期にすでに線香などの産業が始まったといわれている。線香作りが始まったのは150年ほど前の江戸末期といわれ、日光で始まった杉線香作りが、日光の工房が火災(2軒)になり、新たな製造場所を求めてこの地に移り住んで始めたといわれています。記録によれば、明治から大正時代にかけて、10軒以上の水車小屋があったという。水車は流れの急な水流を利用して動力とするものだが、線香以外にもそば粉を挽いたりする業者が集まっていた。しかし、現在では線香を製造するところはニッコン紫山堂さんと駒村清明堂さんの二軒のみとなった。

また今でも水車を動力としているところは「駒

村清明堂」さん1軒だけである。創業は明治時代で、100年以上同じ製法で線香作りを続けている。地元の杉の葉を良く乾燥させたものを使います。樹齢50年以上の杉が良いそうですが、この辺りも年々材料の調達も苦労されているように感じます。材料の調達は秋から冬に1年分を確保するようです。それを冬場に蓄えて、乾燥させると茶色くなってきます。すぐ裏手には恋瀬川の源流から引きこんだ清らかな水が勢いよく流れています。とてもきれいな冷たい水です。



この水を直径4.3mの水車の上から勢いよく流してゆつくりと回します。冬場で雪の降った後でしたので水車の周りには氷がついていました。

この水車は丈夫なマツ材を使っているということです。全て自然に優しい材料ですね。

小屋の中では、水車で杵を動かし、丁寧に時間をかけて(1.5日〜2日)杉の葉を細かくついて行きます。水車でゆつくりと砕いていくことで、香りが逃げないとのこと。

その細かく砕いた杉の粉にお湯を加えて練ると自然に固まるため、糊などを使わないといわれています。線香の色は自然の杉の色。乾燥させた杉は茶色です。緑色の線香は着色したもののようです。このような伝統的な技法で作られていくことは大変なことですが、是非続けて欲しいです。

△弓矢（矢竹）▽



もう一つ伝統を受け継ぐ「矢羽根」の製作を紹介します。場所は小幡宿から真つ直ぐ進むと十三塚を経由して筑波山の風返し峠へ出るが、冬場は一度雪が降ったりするとほとんど通行止めとなります。途中から右に「ゆりの郷」方面に曲がる道があり、この道は先の方で湯袋峠を越えて真壁へいく道と左に曲がって先ほどの「風返し峠」に続く道に分かれます。こちらは比較的ならかなので通行は大丈夫です。

さてこの弓の竹矢づくりは「ゆりの里」方面に曲がるすぐ手前にある家と、曲がった先の白鳥神社の裏手の2件の家で作られています。石岡市

のHPの紹介によると「小池貢」（五代目義行）さんと「助川弘喜」さんの2人の方だそうです。

竹を独特の形に束ねて、半年ほど天日で乾燥させます。矢を作るのはさらに半年ほど寝かせたものを使います。

弓の矢作りは県内でもここだけだそうです、この地区は日本でも最高の矢竹の産地といわれています。その品質は定評があります。

矢竹を良く乾燥させ、長さ・重さ調整する技術は大変なもので、熟して真つ直ぐにする作業だけでも本場に熟練の技だといわれています。この地区で矢竹の生産が始まったのは、笠間藩士の小池半之丞義高の子、義行（嘉永元年生れ）が、明治になつて禄を離れて糧を補うためこの地で始めたものだと思います。義行が笠間藩の江戸屋敷の家老をしていた時に知り合った、徳川公の弓矢職人である大森政長をこの地と呼んで手ほどきを受けたことにより始められたとのこと。素晴らしい職人の技を残していつてほしいものです。

なお、十三塚の山に登る少し手前に筑波霊園の看板がありますが、この霊園の隣りにひっそりと昔、徳一法師が筑波山の回りに配したという筑波四面薬師の一つであった「山寺」がありました。今はその薬師堂は常陸国分寺に移設されてありますが、ここには石佛などが残されており木々を渡る風の音が昔を思い出させてくれるような雰囲気のある場所です。

峰寺として広く知られる西光院は、平安時代初期・大同2年(807)徳一大師の開山と伝えられ、はじめ法相宗であったが鎌倉時代に一時真言宗となり、のち天台宗に改宗した。本堂は本県では類例のない懸造りで県の文化財（建造物）に指定さ

れており、廻廊からの眺めはすばらしく関東の清水寺の名に恥じない。この寺の約6mもある立木観音菩薩像は、桧材寄木造の巨像である。なお、境内西方にある球状花崗岩（俗称小判石）は県指定天然記念物である。（入口にある案内板）

京都の清水寺の舞台と同じ様な懸造りであるが、違いはこの寺が山の中腹に建てられていることである。廻廊からの眺めはすばらしい。東筑波ユートピア（さるなどの動物公園）が隣接しており、新緑や紅葉の時期に天気の良い明るい日に訪れてください。

我が労音史（29）

木下明男

20代に参加した労音運動は、1950年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1958年の社会情勢と音楽状況

1950年代がコソボ問題でユーゴ空爆。欧州に新通貨ユーロが誕生。英国統治のマカオが中国に返還される。台湾中部（死者不明2万人）、トルコ（死者不明17000人以上）で大地震発生。日の丸と君が代が夫々国旗と国歌にする法律が制定。茨城県東海村の民間ウラン加工施設で初の臨界事故が発生（1人死亡）。金融ビッグバンが進行する。（勸銀、富士、日本興業）みずほ銀行／住友、さくら（三井住友銀行）東京都知事に石原慎太郎が当選する。

仙台市で三善晃のオペラ「支倉常長（遠い帆）」が初演される。プラーハ国民歌劇場が来日し、ヤ

ナーチェセラールとなる。小澤征爾のウィーン国立劇場音楽監督就任が発表された。庄司紗矢香(V)が16歳でパガニーニ国際コンクール位入賞する。クレームル演奏のピアソラ「ブエノスアイレスのマリア」が評判を呼ぶ。JASRAC(日本音楽著作権協会)から、著作権大幅引き上げの提案が出される。これに対し、音楽文化発展の妨げになると、全国の労音は撤廃要求書を提出。今後この改悪案に反対する関係団体と協力し、共闘を強めることを確認。

この年逝去した著名な音楽家・文化人・淡谷のり子(歌手)三浦綾子(小説家)いソノてルオ(音楽評論家)笹谷栄一郎(訳詞家)瀧澤三重子(声楽家)東敦子(声楽家)メニューイン(ヴァイオリン)ホアキンロドリゴ(作曲家)

1999年の労音の動き

第47回総会では、固定会員目標を確認し、運営・企画方針が確認される。この10年間の運動を見ると、前半は毎年伸びて年間110,000人を超す組織をしていた。財政面では赤字の克服はできず、運営委員会・事務局の強化を図りながら新たな方策を立てる課題が急がれる。「固定会員制度」も都心部ブロックが加わり東京全体の取り組みとなる。3年間にわたり、全体目標を立て取り組んだが、現状維持が精一杯で、集中した会員拡大が出来ず、目標未達成に終わった。

東京労音は、経営体と運動体と言う二つの性格をもって活動を進めている。この3年間の伸び悩みの要因は、経営体に重点が置かれ、会員拡大より一般券を増やし赤字を生まない方に中心が移った事が挙げられる。例会数は189ステージを企画

し、118,601人がコンサートに参加した。企画数は34ステージ増えたが、コンサート参加者数は3,600名増にとどまり、1企画当たりの参加者数は減少した。

1年ぶりに再開したクラシック例会は、1月「荒庸子チェロリサイタル」、新シリーズ企画「Dore's Best リサイタルシリーズ」がスタート(長谷川武久監修で、真摯に取り組む若手や中堅の演奏家に、文化会館小ホール企画で力を発揮する趣旨)。以降松岡みやび(ハープ)や神谷未穂(ヴァイオリン)が予定される。東部ブロックや南部ブロックで定例となっている「音楽の楽しみシリーズ」も、益々新人クラシック演奏家の発表の場、クラシックを身近に楽しむ場として着実に実績を重ねている。他に、チャイコフスキーコンクールで優勝した佐藤美枝子(ソプラノ)や美空ひばりのメロディーをヴァイオリンの音色で奏でた「幸田聡子」が好評だった。「亀淵友香とThe Voices of Japan」の取り組み、クリスマスイブに「VOJAと一緒に歌おう」でゴスペルコーラスを募集、150名を超す若者が応募し熱気あふれる練習が行われた。当日はVOJAキッズや各地コーラスの友情出演もあり、400名を超す大合唱隊となった。20代の若者が中心で、若者たちの意識や要求を知るうえで、また新しい聴衆を迎える点からも大きな成果となった。45年間続けている「第九」の大合唱も好評で、350名を超す合唱団で人類愛と平和の精神を織り込み「歓喜の歌」歌い上げた。

VOJAと同様のポピュラー新企画として、「グッチ裕三ファミリーコンサート」が、夏休みファミリーコンサートとして、子供料金を設置し、本部・都下・東葛で昼夜4回を成功させた。「岩崎宏美」

「五つの赤い風船」「戸川昌子」「長谷川きよし」等を数十年前ぶりに企画。皆、懐かしい中にも新鮮で大好評だった。なかでも「岩崎宏美」は4公演、「五つの赤い風船」は27年ぶりの再結成で、青春時代を思い起こす50歳前後の男性が7割占めるコンサートになった。府中の森芸術劇場での「楊興新コンサート」も好評で、ふるさとホール500席を満席で成功させる。ゆうぼうと例会として取り組んだ「タイムファイブ結成30周年コンサート」が、高い評価を得て、平成11年度芸術選奨文部大臣賞を受賞。若手浪曲師「国本武春」の江戸東京博物館ホールで開催の「国本武春ワールド博覧会」も文部大臣新人賞を獲得。労音の例会として企画したステージが、各賞を獲得したことは、大きな励みとなった。イベントではできない、労音らしい企画と言う点で大きく前進した年になった。

伝統芸能の企画では、東葛ブロック恒例の狂言の夕べ(野村狂言の念)を、松戸・市川・八千代で6回成功させた。津軽三味線(高橋竹童)も城北・府中・東部・東葛で4回取り組む。高橋竹山3回、鬼太鼓座3回、落語3回、国本武春7回を取り組んだ。

海外アーティストでは、舞踊「グランディーババレエ団」「マラーテリツイ舞踊団のカルメン」歌手では「ジョルジュ・ムスタキ」「オマール・ポルトランド」「ゴスペル・クワイアー」グループでは「プラターズ」「ザ・ベンチャーズ」「グレンミラーオーケストラ」「ビルポーターオーケストラ」「エンリケクッティニ・タンゴ楽団」がある。「バラライカオーケストラ」は、ダークダックスをゲストに迎え話題作りをした。内容の評価は高かったが、厳しい取り組みとなった。「マラーテリツイ舞踊団

のカルメン」は、初来日で知名度が低かったが、読売新聞社の主催名義で内容的にも財政的にも成功し、差来日を望む声が多く寄せられた。

地域活動の拠点として活用されている各センター
●大久保会館

会館貸し出し収入は17%増に、要因は利用者への要求に対して、極め細やかな対応をしてきた。ベルディ芸術文化振興会や RDM (レコーディング・ミュージシャンズ・アソシエーション)との共同企画、定期使用が増えた。渋谷のジャンジャンが閉鎖した今、変わる小会場として企画の実験や発表の場として定着。

●十条会館

会館中心のイベント、新年会(1月)労音十条合唱団発表会(7月)十条まつり(9月)ダンスパーティー(12月)等の開催協力者を幅広く集め成功させてきた。貸し出し収入は99%まで達成。

●お茶の水センター

定期利用団体の解散や活動停止等があり、貸し出し収入は減少した。それでも、大切な活動拠点として使用され、管理者と利用者の関係は良好。他に、ミニコンサート会場として利用度が高まっている。

●南部センター

センター寄席を3回開催。例会の学習場として利用。地域でも、歌声喫茶・バザー・ロックバンドコンサート・ギター教室等に利用されている。

●東部センター

センター企画を積極的に進めている。「日の出寄席」を5回、「音楽の楽しみ」を4回取り組んだ。ポピュラーコンサートも4回、ライブハウスとし

ても活用、映画の集いも2回開催。センターを拠点とした「民族音楽教室たみの会」「合唱団たんぽぽ」「労音車人形の会」等が活動している。センター企画でデビューした「いつこく堂(腹話術)」はメジャーなアーティストになった。「音楽の楽しみ」に出演した若手アーティストの間では、東部センターに出演すると出世する神話が囁かれている。

●ギター館

年間12回のコンサート、土日の開館日には1日3回のミニコンサートを行ってきた。入場者は年間3,300名。毎月のコンサートは順調で、今後労音との企画提携も検討中、財政的には黒字決算。「夏の交流会」は、式根島で開催され62名が参加した。参加者の評判は良かったが、取り組み不足で目標を大きく下回った。「冬の交流会」は、蔵王温泉スキー場で開催され37名が参加した。夏冬とも十分な取り組み時間をかけ、より楽しい内容にして、多くの参加者を組織することを確認。

隔年開催の全国会議は、今年度伊豆大川で41団体25名が参加して、全国労音交流集会在開催された。ヘギー葉山の記念講演とミニコンサート「労音とわたし」労音に期待するもの」が開催し、参加者の評判を得た。交流テーマは「大合唱・第九」の取り組み×クラシック例会作り×魅力的な音楽会作り×会員制と民主的運営の4分科会で経験交流を図る。秋には、税金問題学習会(坂内直治

税理士講師)を開催。
(つづく)



石岡市指定文化財(三十二) 兼平智恵子

今回の石岡市指定文化財のご案内は、石岡市の最北端、恋瀬川の源である、筑波山や加波山系の山々、のうち、板敷山の麓に抱かれた、板敷山大覚寺に存在する造園で、どの角度から見ても裏がなく「裏見無しの庭」と称されている庭園です。

○大覚寺 庭園

大増三二二〇

名 勝

指定 昭四三・三・十五

今回も石岡市八郷総合支所からの出発です。車で約十五分。前回の佐自塚古墳行きでウオーキングしました主要地方道土浦・笠間線に入ります。約二分程で右側の奥に、佐自塚古墳を包む杉木立ちを横目にしながら前進……。

民家の間を走り抜けると、両わき田園の、曲がりくねった道路になります。前景からぐるっと山々が迫ってきます。雄大な景色！危ないです！車を止めて眺めましょう！

そして民家の間を抜けると宇治会の交差点、更に前進、山並み、田園の中、走ること約二分、信号のある大増丁字路、左折。50号線に向かいます。間もなく左側に石岡市農村資料館入口の看板、一分もかからない内に、右側に大きな大きな「板敷山大覚寺入口」看板が現れます。

穏やかに佇む白い屏に囲まれた本堂。ゆるやかな参道を上って行き左に折れる。白い塀と山門の前を走りぬけると駐車場、到着です。

——八郷町史によりますと 板敷山大覚寺とい、親鸞関東教化中法難の遺跡として有名である。山伏の弁円は親鸞の布教する浄土真宗により、修

験道の衰退を恐れ、承久三年（一二三二）親鸞を板敷山で待ち伏せした。弁円は大屋を造り、不動明王を安置して祈り、親鸞を襲ったが失敗した。その後、稲田に親鸞を襲ったが真宗の奥義を説かれ弟子になった。弁円四十二歳、親鸞四十九歳であった。弁円は那珂町に上宮寺を建て明法房となった。

大覚寺の創建は承久三年で周観大覚といわれている。元の場所は山のほうにあり、明円寺といっていたが、天明二年（一七八六）の夏の山津波で本堂は八〇〇m下に流された。その後、現在地に再建したが安政元年（一八四五）の正月に焼失、現在の本堂は慶応二年（一八六六）の建立である。

本尊は阿弥陀如来、寺宝として法華経第五巻があり、奈良時代初期の作で県指定文化財。そのほか法然作といわれる六字名号、室町時代の作といわれる聖徳太子絵伝がある。庭園は千利休の造園で「裏見無しの庭」いう。なお、近くには弁円の護摩壇石、待伏山、弁円懺悔の場所、親鸞の説法石などがある。

浄土真宗

開宗は親鸞（一七三〇～一七六二）、叡山で慈円について得度し、法然の弟子となった。後、越後の国に流され、放免され常陸国に来て、建保二年（一二二四）四二歳から貞永元年（一二三三）六〇歳まで、稲田を中心に布教に努めた。本尊は阿弥陀如来で南無阿弥陀仏を唱えることよって浄土に往生できるとしている。

八郷町史より

尚、八郷町史の文中で一部謳ってますように、県指定文化財、妙法蓮華経。同じく県指定文化財、弥陀名号と、また板敷山大覚寺の名称の由来に

きましては、当云報一二九号にて紹介しています。併せご覧頂ければ嬉しく思います。

さて今回の石岡市指定文化財、大覚寺庭園は本堂に向かつて左側の奥にありました。中央が池になっており、池の周りには松や広葉樹や他の古木と自然石と池の中央にある小さな島に可愛い灯ろう、その調和が素晴らしい。持っていたメモに思わずスケッチ。伺ったのは三月中頃でしたので花は多くありませんでした。梅・アヤメ・睡蓮など季節に応じた花の薫りを漂わせると言う。

住職さんにお話し頂いて、池を中心にひと巡り、池のほとりに趣のある客殿、江戸時代の建物ですが平成の初めに改修されたとのこと。建物を入れると絵に奥行きが出ます。そのほかに珍しい四方竹（竹が丸くなく四角い）、黒竹（黒い色の竹）が庭園の中に、そして寒山竹と言う、中国の寒山寺から伝わったものと言われている竹で三株の中でしか自生しない、通常の竹のようにあっちこっちはえないうと言った住職さんのお話でした。寒山竹は説明板の後ろに柵がまわっています。よく見ると三つのかたまりが分かかります。

なお、庭園は京都にあります「桂離宮」を模したものとすることでお調べになり、比べながらの見学をお勧めします。ご本堂へのお参りが最後になってしまいました。山門から入ると樹齢五〇〇年のヤブツバキ、遠慮がちに紅色に咲いていました。

○大地をも彩るヤブツバキ

智恵子

（注）八郷町史 文中、天明二年（一七八六）は（一七八二）

安政元年（一八四五）は（一八五五）と思われる。）

祈りはあった

伊東弓子

館長さんが言われた。「石佛、石祠、道しるべの守り役をしてください。先人達がこの地で生活をしてきた証として立っているのです。」

その言葉を大切に思い、心に決めたのだった。

本当に静かに、傾いても雨に濡れてもじっと、置かれたまま時を刻んできた姿を思う。人を尋ねる為に、用を足す為の案内として、又行き倒れの人を供養したり、長道中をする人の安全を願ったり、心安らぐ場所でもあったろう。人間の都合や欲で一か所に集められたり、盗難や打ち毀しの災難にもあつてきたことを思うと、守らなければならぬ、一人ではなく、みんなに知ってもらって沢山の人の心で守らなければと欲を出す私だった。辛い歩きや自転車の生活は道端や藪の中に視線を置き易く、元来の気の良い性格が役立つたようだ。

コロナの状況の中で玉里御留川の活動も、随分工夫してきた。観光地に頼る楽しみだけでなく、自分達の困り郷里を見詰めなおす活動だとこの一年取り組んできたが、今回は暮れから三か月も経って冬ごもりから目覚めたかのように動き出した。“春の散策を楽しもう”と、誘いのチラシを配り出した。

私自身の先祖探しは、昨年の除夜の鐘突きから元旦参りと、始まった。玉里御留川を歩くことにし、社会に出ていく孫に声を掛けておいた。三大古墳から初日を拝み、長い人生をもつ孫と先の短い婆さんとの自転車の出発とする積りだったが、加わりたいたいという母親の車で苦のない旅となった。高浜台の舟塚山古墳（一人）でたなびく雲の間に

に初日が顔を出した。柏崎の富士見塚古墳(三人)から御留川を見、橋は車の数もごくごく少なく、気持ちよく渡り、沖洲の三味塚古墳(二人)と、大きな自然の中にいる自分を再発見できるような令和三年の出発だった。

その後、百円玉を持って犬との元朝参りならではの新春の散策が二十日正月、否旧正月迄も続いた。

館山神社の石段を登るのも足が重くなった。昔の人はここを登ったのだろうか、信心の心が支えとなり、杖となってくれていたのか。社殿の屋根替えも終わったが、掃除も祭りもない。こんな時こそ神頼み、コロナ退散の祈願でも行おうといった。と思ったが、心あるお世話人ご夫婦が常に掃除をしてくれていることに感謝、何も手伝わっていない。今から四十年前も前、六年生になった下高崎の子と、土地のお爺ちゃんお婆ちゃんと、昔話を聞く会”をもったことがある。三月に入って土曜日毎に四回、七年間続けた。大人になって高崎を離れても生まれ育った故郷のことを忘れないようにという願いを込めて。末娘が六年生になるまで楽しくつづけたこの時の話しは私にとつても今につながる貴重な話が多かった。山口ヒロナリさんの写真に山桜の散る館山神社の前、女の子が遊んでいる物がある。それを高崎に贈ったが、今尚大切に集落センターに飾られてある。十円玉、一円玉が投げられてある。お参りした人がいたのだと、心おだやかになる。

恵比寿神社、ここは御留川で漁の始まる前の神事が行われた場所だ。小学生の時、父と配給を受けに来たこともある。今、舞陽花が植えられている辺りに野菜出荷所があって、そこで昔話を聞く

会の子供達と寝泊まりしたことがあった。あの時カレーのスプーンが見つからず、あの子にすまなかったと今も心にかかる。「石の佛さまはもつとあつたよ」と話を聞いたが、数は少なくなつてしまつている。狭い所に消防小屋もあったが、今は真向かいに移った。一円玉、五円玉、十円玉がむき出しに置かれている。今、私は百円玉のお賽銭を投げられる程、寸懐具合もよいので失敬しようとも思わないが、貧すれば鈍する、状況によつてはどう変わるかわからない。

高崎の絵図に確りと記されている円妙寺下寺跡にお堂がある。一角に壺柵車を入れる建物がある。建物が高いので危ないという事で、壊す筈だったのにその儘残つていて個人宅の物が入っている。車だけ処分されおかしなものだ。膳椀小屋も壊されてない。傾斜地にお堂があるが鍵が掛かっている。堂内も篠笹で何が祭られてあるか分からない。右、墓地前に筆塚がある。周囲に人家はあつても人の優しさが感じられない場所だった。

高崎、田中、高浜村境の分かれ道に、成田山へ行く道しるべがあつた。この冬空の下に咲いた鮮やかな花が飾られてある。あつ造花！一瞬声に出た。でも、ある坊さんの言葉を思い出した。

「それも一つの祈り、一つの心、ないよりも、枯れた花があるよりも・・・と、思つてあげなさい」素直な気持ちになつてここから成田山迄どれ程の道を行つたことだろう・・・と、一人一人の思いを思ひてみた。

みまい、きくまの坂がある。稲荷堂があつて三猿の彫りもある。近道として人が踏みつけて出来た道だった。赤飯がラップに包んであげてあつたのだろう。ラップも赤飯も散らばつていた。お

狐さんが頂いたのか、まあ誰かがお恵みを頂けたら良いことだ。

松山の薬師堂に寄つた。夏祭りはどうどん祇園と呼ばれていた。隣り部落の私も遠慮なく行つてご馳走になつたものだ。節分の晩、雷電山に行く前、ここで豆を播き、袋の中の豆類(甘納豆、大豆、落花生)を頬張つて一休みした。子供達と楽しく立春を前にした夜だった。何年前前にお堂の土台をなおした。見るからに全体が確りした。柵といわしの頭がささつていた。賽銭を投げるととても良い音がして堂内を転がっていった。右側にある弘法大師のお堂の土台の腐りがひどい。何とか地区の人達力を合わせて考えてほしい。

その後、鬼子母神のご縁日は楽しかった。途中であつた人(男)が「ああ、今日は大井戸のお釈迦さまか、ご苦労さん」と声を掛けてくれた。女達は都合がつかなくなつたらしいが、掃除当番に男の人二人が喋つていたので仲間に入った。手づくりの煮物、漬物、それと摘み、アルコールも入つていた。こんな場所はいい、いつまでも続いてほしい。いつまでも行きたい。

帰り途中、青面金剛供養塔がある。毎月篠笹に覆われていたが、今日はなんと気持ちのよいこと。地区の人はいた。地区の人の心はあつたと安心してお参りが出来た。谷津田の反対側に(家畜を吊る碑)がある。ある人が、「あれだけ一門さんを尊敬し農業に取り組んできた人達が墓に花一本あげる人も今じゃいまい」と嘆いていたのを思い出し寄つてみた。玉川農協組合長、山口一門氏と玉川地区の農業が、全国に注目を浴びた頃の畜産農民連絡協議会が建てたものだ。案の定碑は篠笹の林となり見えなかった。蓮の生産では頑張っている

地域だが、農業の心は受け継がれているだろうか。

上玉里、下玉里の境近くに薬師堂がある。「めづ」の絵馬が落ちていた。その上に十円玉が幾つかあがってあった。お堂の周囲は草が刈られ、新年に相応しい装いだっただ。

清々しい気持ちで地域の石佛に会い、道しるべを確かめ、それぞれのお堂をお参り出来た。

今回歩いた所には、地域が残っていた。そこには人がいた。心があつて「祈り」の形があつた。今、人間の中の多くは自分が一番偉くなつてしまつている。大きな自然の力やその中に見える佛や神は考えもしない。ましてや、今自分という存在があるのは、長い長い時間を生き続けてきた先祖のいたこともすっかり忘れているのだから嘆かわしい。

心配な場所や扱い方は何ヶ所もある。歩いたり、自転車で動ける限り護つていこうと思う。今回の「春の散歩でたのしもう」で何人かでいい、興味のある人が出てくれることを願つて楽しみに頑張つていこう。

筑波山

小林幸枝

少し前になりますが、2018年8月2日、茨城県の筑波山が「日本夜景遺産」に選ばれました。

筑波山の山頂から見える夜景は素晴らしく、関東平野を一望できるため、街には灯りがまるで宝石を散りばめたように遠くまで眺められます。その美しさは、日ごろの疲れも吹き飛び、心が癒され、まるで別の世界にいるように感じます。

関東の霊峰、日本百名山の一つに数えられている筑波山の山頂からは昼間の景色もすばらしいのですが、夜には麓のつくば市と土浦市はもとより遠く関東平野の夜景を一望でき、また、天気にもよりますが東京都心の夜景や東京タワーと東京スカイツリーの光も見ることができます。

またこの「日本夜景遺産」には、翌年の2019年にもう一つの夜景が茨城県から登録がありました。それは、茨城県日立市のかみね公園頂上展望台から眺める夜景です。これで県内では、筑波山の夜景と2カ所が選定された事になります。

地上に煌めくスターダストと天空に煌めく星空を満喫できる筑波山で、素敵な一時を過ごしてみませんか？



新たな挑戦

1

菊地孝夫

少年時代の親友の一人が、吃音症（どもり）だった。けれども学友たちは誰一人として、彼をかかさずはしなかった。考えていることが多すぎて、いちどきにそれを伝えようとして、口ごも

ってしまうのである。みんなもそれがわかっているから、何も言わない。

彼は、数学が好きで、15・6歳ですでに大学クラスの高等数学を独学していた。M・S君という。学校帰りの道々、つかえながらも今読んでいる、私には到底理解できない難しい数学理論をまさに、口角泡を飛ばさんばかりといった勢いで語り続けるのだった。

私はいささか閉口しながらも、駅までの30分余りの道々、ずっと彼の話を聞き続けた。

後年、彼は一流企業に入り、大学院卒ばかりの中で、それらの先輩たちに交じって、優れた成果を上げている。

彼のことは、以前にも少しだけ触れている。忘れられぬ思い出である。

たまたま、朝につけたテレビで、吃音の女子高生を取り上げていたので、彼の事をふと思い出しました。

小学校時代にも、吃音の同級生がいて、クラスのみんながからかっていたのも思い出します。今という「いじめ」にあたるのだろうか。

先の友人は、そのあと、吃音はなくなつた。仕事の成果が周囲から認められ、自分に自信を持つことによつて、自然に吃音も消えたのだろうかとおもう。

中には深く悩み続けてしまう者も大勢いるだろう。吃音がもとになってひどいじめにあうものもいて、悲劇を生んだりもする。

吃音を克服しつつある、この女子高校生には、良かったね、と言ってやりたい。

私自身にしても、時にはどもってしまうことがあったが、頻繁ではなかったから、トラウマにも

なっではないかい。

そのあと、センバツ高校野球の話題に切り替わったので、スイッチを切った。セミプロまがいのプレーなど見せられても、いささかの感動も覚えない、いわば鈍感な爺さんの一人になってしまったようだ。(笑)

恒例の、春の甲子園が始まったことに全く気が付かなかった。

そもそも子供のときから、体育が大嫌いだったし、年を重ねるごとに、スポーツ全般にはほぼ興味が湧かなくなってしまうた。

中学時代の体育の授業にいたっては、苦痛以外の何物でもなかった。

自他ともに認める、運動音痴のわたしです(笑い)。

梅の花が満開となり、いよいよ桜も咲き始めて、春本番となってきました。野草や、家々の草木の花が一斉に咲きだしました。近づいてよく見ると、野草の小さな花もなかなかきれいです。

小生も、たまには店屋の植木などのぞくこともあるんですよ。

ベランダに置いておいた、プランター紛いの発泡スチロールの植木鉢から、去年の夏拾ってきた白ユリが芽吹きました。夏には二輪の花を咲かせることでしよう。

同時に、花粉の奴ががどんどん飛びまくって、こちらの方は暖かくなつた所為とはいえ、あまり有り難くはない。

少し外出しただけで、部屋に戻ると、くしゃみの連発である。ティッシュペーパーが手放せなく

なってしまう。

朝方、自分のくしゃみによって、たたき起こされたりする。同時に目のかゆみにも襲われるしでさんざんで、今年は珍しくも、薬局で目薬を買ってしまった。

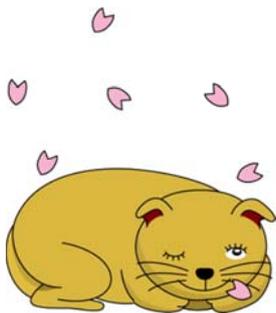
「こんなほとんど水分のものなのに、高い金を取りやがる」とつぶやきながら(笑)。目にたらずといくらかはかゆみも治まる。

困ったことには、喫煙の習慣が抜けない為に、症状も軽くはならない。

この冬は、さほど寒さも感じませんでした。頻りに暖房器具(エアコンや電気毛布)を使ったせいもある。おかげで、電気代がぐーんと跳ね上がってしまった。

新たな試みとして、本格的にネット上のチャットに参加しています。大半が若者たちですが、中には六十代、七十代の参加者もちらほらいます。外国人も参加してきます。この世界は、国境を越えて、世界をつなぐ物の一つとなっているようです。

時には、貴重な情報も流されたりもします。そのうちには、国境という概念も、地球上からなくなってしまうのかもしれないね。



風と共に 《理》

大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「心」

目には見えないもの、捉え難い幻。

永遠のテーマでもありません。

それが例え家族であっても、素の心を曝け出すのは難しいものです。

ましてや他人が、誰かの心を手中にするなど、それは偽りと言わざるを得ません。

夫婦・恋人・家族・友人、良縁を築いているとすれば、お互いの心の色が似ているのかもしれない。色と述べましたが、実際に色がついているのを確認したわけではありません。様々なタイプの思考や嗜好、そこに至るまでの道程を仮に表すとして、今回は色と呼ぼうと思います。

良縁とは限らず、良くこんな事を耳にします。

何でいつもあーゆー奴を選んじゃうのかな??

これは、ある意味では別の色を好んで選んでしまう、例えば赤と青で紫。

赤と黄でオレンジ。の様に、全く別の色通しを掛

け合わせると、特定の色となってしまう様に、その結果どんな色になるのか、そこら辺を始めから目指しているのかも知れません。

似たもの夫婦、これは色のパターンが元から似ているのかも知れません。

この色通しが、今後の人生にどの様な影響を与えて行くのか、

結果、新しい色へと変化し、その色が明るく心が晴れやかな気分になるとすれば、

それは大成功な出会いなのでしょう。

人間関係を築いて行く過程で、ともすれば上辺だけを取り繕い、お互い不可侵ではあるものの、離れ過ぎない良好な関係もありえます。ですが、深く相手を理解しようとした時、歩み寄りの中で時には互いに痛みを伴う事もあります。

自らが望んで構築したい枠組みを構成するのであれば、そこに自分以外の誰かとともにするのであれば、より相手を理解していく必要が出てきます。

10の出来事の内、8同じ考えであつとしたら、残りの2も大きくズレた感覚では無いのかも知れません。中々ここまで共有できる事も難しいですが。

大抵は何かを我慢・犠牲にして、人間関係を保っているかと思えます。

そこには、悪い事ばかりではありませんから、一概に何がその人にプラスとなるかは分かりません。

経験の1つとして学ぶので有れば有意義な事です

し、新たな気づきを得た事により大きく自身が成長するきっかけとなるかも知れません。

井の中の蛙大海を知らず、自分の狭い了見の中でそれを良しとして日々を過ごす、それも勿論否定出来るものではありません。

しかしながら、私自身としては、その様な固い思考を持ちながら生きて行くのは正直難しく思います。

自分の心に従って生きる。

人間とは考える生き物であると、おおよそは脳内の伝達物質があらゆる指令を体の至る所へ飛ばし、その結果として喜び怒り哀しんだり楽しんだり、となるわけですから、心ではなく脳に従っています。理性ですね。

心に従い脳の指令を無視したとすれば、それが正しく本能というものでしょうか。

日々の暮らしの中では、常に理性を持って人間たらしめる行動が必要となりますが、時にはその心のままに本能のままに行動しなければならぬ時もあるのでしょうか。

それも、動物として必要な事なのかも知れません。

理性と本能とのバランスを正しくとって、人生を全う出来ればそれが何よりの事ですね。

何事にも、言うは易く行うは難しと申しますが、一つ一つ前に進む為にも、困難から目を背けず、立ち向かいながらより良い方向性を目指せばと

思います。

私事ではございますが、先月におきましては、子供の卒業・入学、家の引越し等により、皆様にはご迷惑をおかけしましたが、今後共よろしくお願い致します。



【風の談話室】

《読者投稿》

やと暮らっ(50)

やと女

近くの溜池から豊後荘病院に向かって坂道を上って行くと、ピンク色のフワツとした桜花が見ごろ・・・。振り返ると我が家が見えた。もうこんな時期・・・一年は早い。

・青空に誘われて備前焼の焼き物屋さんへ。以前この時期に伺ったときのハクモクレンに感動したことがあり、連絡をとると見頃だとのこと。急坂を登って行くと花と青空と遠くに筑波山。工房で入れてくれた備前焼のカップで飲むコーヒの美味しさ。窓からの景色。ほっとする気分。今週は一大イベント登り窯に火を入れるとか。赤松の薪がなかなか手に入らなくなつてと少し嘆いていた。

・3月入ると田畑の方も賑わって来た。散歩中、畑仕事の中から、薪ストーブあるのだろ。切り出した木あるから持って行っていいよ。と、声がかかった。ついでに畑の白菜も持って行って良いよと言われ、捕りに行くと、軽トララックに積んでいる所で、2度も家まで運んでくれた。農作業の忙しい方なのに申し訳ない気持ちです。私はお言葉に甘え、早速の白菜狩り。運んでもらった木はチェンソーで切ってあった。薪割りはしばらく染しめるねと言って軽トラは帰って行った。散歩していると普段顔を合わせないような方にも出会い、新たな交流も生まれたりして楽しいものですね。

・風もなく暖かな一日・・・。久しぶりにいちご家さんにお邪魔・・・。いちご団地周辺では、いちごを求めるお客様で大賑わい。知人のいちご家さんも、朝取りいちごこのパック詰め、早々に完売。その後は予約のいちご狩りのお客様で賑わった。このコロナ禍のいちご狩り、ハウスに入る前に体温測定し、密にならないよう配慮と気を使っていた。私も思いつきり試食させてもらった。今が一番美味しい時期かもしれません。

・お彼岸のお中日、いちご家さんに顔を出すと、ぼた餅いっぱい作ったから一緒に食べようと言われ、ごちそうになった。この辺り、春のお彼岸にはもち米を炊いて、たつぷりの餡子をのせた物を作るのが習わしかった・・・。最近ではおほぎを買って、仏様に供える家がほとんどだと思う。懐かしくぼた餅をいただいた。その後薬師古道、龍神様辺りまでの軽いハイキング。帰り道薬師さんのログハウスに立ち寄り、咲き始めた花などを散策

して帰って来た。一日が早かった。

・ある暖かな日、いちご家さんはいちごの収穫最盛期です、同時に来年に向けての作付け準備。プランターに土を入れ新しい苗を植える作業が始まりました。いつものメンバーが集まり、皆で楽しみ乍らのお手伝いでした。大勢での作業なので、あつと言う間に終わった。

・定期検診日、思えばこの石岡医師会病院にお世話になってから、17年もの年月、そのうちの15年は東京から週1回パートで診療に来ていた先生が主治医。たいした病気はないが、何かにつけ先生の診療日に飛び込んで行った。石岡医師会病院は今月いっぱい閉鎖。次何処にかかるか決めなければならぬがまだ、決めかねている。待合室はそうした不安の声でいっぱいだった。この15年ともいい主治医に巡り会い安心感いっぱい過ぎていたもので、はて、今後は如何するか悩む所です。

・春爛漫、心ウキウキの季節。薬師古道のアップ記事を見た、有機農家のひろみちゃん。私も行ってみたいと声が・・・。早速出かけることに、此の日朝から盛りだくさんの八郷巡り。まずは、青柳の大山桜めがけて林道をテクテク、其処此処には、山吹や椿などが満開、風が吹くと山桜がハラハラと桜吹雪が・・・。ニリンソウの群生地は、まだ早めだったようで、花はこれから・・・。目的の大山桜は見ごろで、山を下りるとラッキーな事に、カフェえんじゅが開いていて、N氏に入れて貰った、コーヒーの美味しかった事。その上に、軒下

をお借りしてお弁当を食べ、暫しコロナ禍の事など忘れた。その後薬師古道へ、そして最後は駒村清明堂の石割り桜へ、此処の桜は盛りが過ぎていたが、風に煽られた花吹雪が見事だった。なんと、なんと、美しい山々贅沢過ぎる八郷巡りだった。

おすすめの本

燕石(えんせき)

3月は、さぼってしまい一回抜けてました。

コロナの話題しかなくて、本当に自分でも飽き飽きしてしまつた所もあります。

かといって、何か明るく楽しいものを、と思つても、にわかには思いつかないし、面白くもないニュースばかりで、皆さまを楽しませることが出来そうにもありませんでした。

毎度のように批判がましい話では、読んでくださっている方々にも、呆れられてしまうでしょうから。

そんな中で、去年の夏ごろから、スマートホンを使って、いわゆるインターネットの世界に入っている、「チャット」と呼ばれるグループに参加しています。

「リスナー」と呼ばれる視聴者たちの一人になって、「ライバー」と呼ばれる発信者と、会話をしたりしています。「リスナー」同士でもスマートホンやタブレット端末の画面上で「コメント」と呼ばれる文章によって会話することが出来ます。

更には、お互いに気の合った同士が待ち合わせをして「オフ会」というものを開いたりしています。

昨日までの見ず知らずの、年齢も、性別も、住んでいるところも、バラバラなメンバーが、共通の話題に花を咲かせているわけです。

「海外からの参加も、けつして珍しくはありません」

ほとんどが、今はやっている歌だったり、流行のアニメの話題だったり、あるいは自分の興味や趣味の話題と言ったところでしょうか。

時には冗談を言い合ったり、まじめな相談をしたり。ほとんどは、たわいもない、友人同士の会話のようなものです。

多くの参加者は、暇つぶしなのですが、中には、のめり込みすぎて、「課金」と言って桁外れの金をたくさん使ってしまったり、画面上で、リスナー同士の喧嘩に発展するケースも、見受けられます。

いまや、IT技術の発達によって、電波の空間上では簡単に世界中とつながることができるようになりました。

この先も、この分野は拡大と発展を続けていくことでしょう。もはやこうしたシステム抜きには動かない社会となりつつあります。

使われる電子機器の開発が、間に合っていないのが現状といったところでしょうか。

市場規模も、急カーブで上昇が続いています。この先、どうなっていくのかは、予想がつかません。

当然、ここには、良からぬことをたくらむものもいて、功罪相半ばするといったところであって、私などは、必要悪じやないかと思っています。

たとえば、免疫のない青少年には、少なからぬ

悪影響を及ぼしています。犯罪にまで発展してしまうことさえ珍しくはありません。

ともあれ、法整備がこうした発達についていけなくなっている現状では、こうした困った問題が増え続けても行くことでしょうか。

ボタン一つで、簡単に参加出来るしまうこともいささか困ったことと言えるかもしれません。

昼夜を問わず、ネット空間上には、こうした言葉や、画像が飛び交っています、

おすすめの本は、次回とさせていただきます。私的に忙しかったものですから、あしからず。

茨城県の難読地名とその由来 (13)

木村進

於下【おした】 行方市

この地名は読みにくいと思いますが、「於」は「於いて」であり「お」と読みますので「おした」も読めそうです。でも「於」も「於いて(おいて)」としてしか使われませんので、地名などに使われると読みに窮してしまいます。場所は玉造と麻生の中間の霞ヶ浦湖岸の地区です。

小高に近く、中世の行方四頭の一人「小高氏」の居城があった山の下です。

名前の由来は特に書かれているものがなく不明ですが、角川日本地名大辞典によると、中世以来水上交通の要所とされたという。また縄文時代の「於下貝塚」があると書かれています。

名前の由来を探るために全国の住所から「於」と名が付く地名を探してみました。

・茨城県行方市於下(おした)

・千葉県山武郡横芝光町於幾(おき)

・富山県富山市於保多町(おおたまち)

・山梨県甲州市塩山上、下於曾(かみ、しもおぞ)

・静岡県浜松市浜北区於呂(おろ)

・愛知県一宮市大和町於保(おほ)

・京都府綾部市於与岐町(およぎちよう)

・大阪府岸和田市神於町(こうのちよう)

・山口県美祢市於福町(おふくちよう)

・高知県四万十市中村於東町(おひがしちよう)

・宮崎県西都市都於郡町(このこおりまち)

・鹿児島県曾於市(そおし)

・鹿児島県曾於郡(そうぐん)

・鹿児島県大島郡瀬戸内町於斉(おさい)

ほとんどの地名が「お」と読みます。この中で最も特徴がある大きな地名が、鹿児島県の曾於郡、

曾於市(そおし)です。この名前の由来はこの地が大和朝廷に最後まで抵抗した熊襲(くまそ)が

住んでいた場所、この曾於(そお)の名前はこの熊襲によるのではないかとされています。茨

城県の行方地方は大和朝廷が東国に進出したときに抵抗勢力も多くいて、進出が遅れた地域と思われ

れます。そのため、8世紀初めに書かれた常陸国風土記には行方の地名として「手鹿(てが)」「男

高(たか)」「小高(おたか)」などがすべて、この地にいた

「佐伯(さえき)」「(国)栖(くす)」などと同様にヤマト朝廷に対してさえぎる人々という、もともと

この地に住んでいた現地人(の)の名前から地名になったと書かれています。

小高(男高)が佐伯の名前ですので「於下」も同様

に「男下」で佐伯の名前かもしれません。

次木【なみき】 行方市

次木の場所は玉造から鹿行大橋に向かう国道354号線沿いの両宿、武田の里の少し西側(旧道)です。

この街道は昔の街道筋にあたり、街道並木が続いていたといえます。

そのため、「並木」が続いているので「次木」で「なみき」と読ませたのではないかと考えられます。

「次木村」は江戸期から見られる地名で、何時から使われているのかは不明です。

水海道

水海道【みつかいどう】 常総市

水海道【みつかいどう】 結城市

「水海道」を全国各地名で調べると、茨城以外に岐阜県岐阜市水海道(みずかいどう)があります。

★水海道【みつかいどう】 常総市

角川日本地名大辞典によると、地名は古くは「水飼戸」(森下観世音縁起)、「御津海道」(相馬日記)とも呼称され、水とのかかわりに由来するとみられる。暦応5年(1342)の年紀を有する板碑(報國寺)がある。と書かれています。

一方平凡社の茨城の地名には、鬼怒川・小貝川に挟まれた沖積低地はアクト(悪土)とよばれる水田地帯で最深低地を八間堀川が南流し、集落は旧河道の自然堤防上に形成されている。とあり、縄文時代の遺跡なども多いと書かれています。

角川の辞典にある「御津海道」という漢字を読み解くと、「御津(みつ)」は官や地頭のために荷財・

貨財を積み下ろしする湊(船着き場)のことで、ここにこのような湊があつたと考えられます。「海道(かいどう)」についても「垣内(カイト、カイド)」ではないかとする説があります。柳田國男は「地名の研究」の中で「垣内」についてかなり詳しくページを割いています。

「垣内」は、有力者の比護のもとで住民が耕地化した土地や、将来耕地にすることを予定して囲った土地などを指す言葉といえます。まあ、公の許可を得て、一定の地域を囲い、それを耕作する者を住ませた荘園(カイト集落)といった意味です。そして、この言葉が地名として「垣内 垣外 垣道 垣戸 海渡 海土 海戸 海道 海登 海洞 貝糸 貝戸 貝内 外津 外道 外戸 外渡 外内 外登 皆戸 皆洞 皆渡 皆津 会所 会津 会道 谷津 谷戸 谷内 開土 開津 開戸 開所 替戸 回津 廻津 廻戸 廻道 街津 ケ市 階津 柿内 街道」などという地名になっているというのです。柳田國男はこの常総市水海道の地名は、水運の重要な川港で、「御津垣内」ではないかとされ、江戸時代より前の新開墾地はほぼすべて垣内であり、この地名は全国のすみずみにまで及んでいるといえます。しかし、そのうちに関東では垣内の慣行はなくなり、カイトの地名も、垣外・開戸・替戸・街道・海渡・海道などさまざまな文字が充てられるようになったそうです。しかしこの水海道の地区は鬼怒川と小貝川に挟まれ、何度も洪水が繰り返されてきましたので、この水という字が使われたのも良くわかる気がします。

★水海道【みつかいどう】 結城市

戦国期には「水皆道」と見える地名です。鬼怒川の西岸で、すぐ南は筑西市です。

やはり水が多く、湿地帯であつたと思われます。

こちらも「垣戸」カイト」が海道に変化したのでしょうか。また水海道も「みずかいどう」と読んだ時期もあるようですが、今は「みつかいどう」と「つ」は小さくなっています。千葉県「四街道(よつかいどう)」の名前についても、恐らくこの「カイト」集落から名まえが付いたものと考えた方がよさそうです。

大生【おお】潮来市

大生郷【おおのこう】常総市(旧水海道市)

茨城県には2か所の「大生」があり、読みが少し違います。

★大生【おお】(潮来市)

古鹿島などとも言われる「大生(おお)神社」があり、近くに大生古墳群があります。

この大生古墳群も古代豪族の墳墓と考えられています。

常陸国風土記には、この大生(おお)の名前の由来を「ヤマトタケル命」が食事をとる儀式を行った場所で、大炊(食事)の名前から大生になったと書かれています。また平安時代に書かれた「和名抄」にも「大生郷(おおのこう)」が書かれています。

大和朝廷が東国に攻め入った時に、古代皇室系氏族の「多氏(おおし、おふし)・大氏、飯富氏」が九州または大和地方からやってきて、この地に住みついたとみられていて、この氏族の名前からこの地名になったと考えるのがわかりやすいのではないかと思われます。

★大生郷【おおのごう】(常総市(旧水海道市))

ここには菅原道真を祀る「大生郷(おおのごう)天満宮」があり、日本三大天満宮の一つとも言われています。社伝によれば、菅原道真の三男景行(かげゆき)が、常陸介として常陸国にやってきて、926年に真壁町の白鳥地区に父道真の遺骨を埋葬し(天神塚古墳?)しました。それを3年後の929年に現在の地(飯沼湖畔に浮かぶ島であった)に社殿を建てて、遺骨を移して祀ったといわれています。

いつからこの天満宮が大生郷(おおのごう)と名前が付けられてきたのかはよくわかりませんが、古く江戸時代には「大生郷村」があり、明治22年の町村合併で、大生郷村、大生郷新田村など2村が合併して、「菅原村」となっています。当然「菅原道真」からとった名前と思われます。これまでも、天満宮の名前は「菅原天満宮」などとも呼ばれていたようです。ただ、元々は常陸国ではなく、下総国で岡田郡に属してましたが、延喜式の郷名にこの地に「大生郷(おおのごう)」という名前はみられません。

もう一か所「大生」という地名が千葉県にあります。千葉県成田市大生(おおう)です。こちらは潮来の大生と同じく「おおう」と読みますので多氏と関係があるかもわかりませんが、大きな山の峰を意味する大峰(オオオ)から転訛したのもといわれるとの説明もあります。他に「大生」地名と関連しそうな地名を拾ってみました。

- ・茨城県久慈郡大子町大生瀬(おおなませ)
- ・石川県輪島市門前町大生(おほえ)

・茨城県高萩市大能(おおの)

この「大能」も過去には「おおのう」と言っていたようです。

その他「大野郷」という郷名があり、大氏(多氏)との関連があるかもしれません。

(1) 稲敷市江戸崎あたり、和名抄に信太郎「大野郷」の地名がある

(2) 古河市(旧総和町)あたりに(下総国下河辺荘)「大野郷」の地名が鎌倉期にある。

(3) 水戸市の坪大野、中大野、西大野、東大野、下大野町とう地区は鎌倉期には大野郷であり、「大野の郷」と呼ばれていました。

仁連【にれい】 古河市(旧三和町)

地名の読みは【にれい】だが、近くを流れる川は東仁連川【ひがしにれがわ】、西仁連川【にしにれがわ】であり、江戸時代には日光東街道沿いになり、仁連(にれ) 宿として開けていました。当時は「仁連(にれ) 町」とも称されていたという。また江戸期の仁連村の読みは【にれむら】であった。ちかくに弥生・古墳時代の遺跡があり、古代から人が住んでいた場所です。

「和名抄」には郷名としてはみられないが、戦国期(16世紀初め)になり、下総国猿島郡(さしまぐん)に「仁連郷(にれごう)」が存在しました。それも最初の頃は「仁礼」と書かれたものが見られ、戦国末期には「仁連」になったようです。

このため、今の住所の読みは古代の「仁礼」が復活したものなのかもしれません。

恐らく、長い間「ニレ」とも「ニレイ」ともどち

らも読まれてきたように思われます。

地名由来としては、「にれ」はヌレ(濡れ)の転で湿地あるいはヌラ(滑)の転でなめらかな地形をさすとも書かれたものがありました。これだと「にれ」ならわかりませんが、「にれい」という説明には少し不足しているように思われます。

「仁連」「仁礼」という地名を調べると、他に2か所ありました。

・愛知県豊橋市仁連木町 (にれぎちよう)

・長野県須坂市仁礼町 (にれいまち)

この長野県の「仁礼(にれい)」は信州須坂の「仁礼の里」と呼ばれるのどかな田舎にあります。古くからの遺跡もあり、田んぼで行われる泥んこバレーボール大会などが行われていることで知られています。また地名の由来は、その昔この場所に「ニレ」の樹林が広がっていたことからその名が付き、中世には「楡井(にれい)」と書かれていたといわれています。

愛知県の仁連木町⇨楡木 でしょうから、茨城県の仁連も「楡木⇨ニレのき」が関係していると考えるのが普通の様子に思います。

常陸旧地考 (10)

菊地孝夫

下巻 (三)

○長幡部神社 ながはたべ
神名帳に久慈郡七座、大一座小六座長幡部神社あり。小社なり

國誌に長幡部神社、久慈郡にあり。今其所を知らず。

按ずるに、本国長幡部、絶容是疑う、蠶神云々、見えたり。

当時早く廢れて世に知られずありけん。

今、久慈郡幡村の鎮守をこれ也といえり。社傳に祭神多弓命と言ひ伝う。

風土記久慈郡条に、大田郷長幡部ノ社在り、古老曰く、須賣美万命天下りますときに、御服織る。

したがって、あま降る神の名は、綺日安命、元は、筑紫国日向二折ノ峰より、美濃国引津根ノ丘に到る。のち、美麻貴天皇の御世、長幡部遠祖、多弓命、美濃に歸り給いより避ける、久慈に茲立機殿造り、

初めて織り、其所織り服より衣装と為す、さらに裁縫なく、この内幡という云々。

今の幡村は大田村に近し、疑いなかるべし。

○薩都神社 さつ

神名帳に久慈郡七座小六座薩都神社あり、小社なり

國誌に、久慈郡薩都郷けだし、いま佐都宮明神これ也と見えて今の佐都宮村の明神これなり。

さていま、里人サトミヤととなうるは、後の訛りなり、里の条に言える如く風土記の説、福の意なれば、元はサツノミヤといえしなるべし。

社傳に祭神立早日男命といえり。

風土記に、薩都里云々、東の大山を、賀毗禮の高峰という。祖氣宇天神在り、名称立早日命、一名、早経和氣命、もと、天降り、即座す、松沢松樹八俣ノ上神。神の祟り甚だ嚴かなる、人在りて、向かつて大小便する。此の時、突を示し疾苦は傍

近くいる人をことにいと甚だしく苦しめ、状をつぶさに朝に請い、片岡の大連遣わして、敬い祭り祈りて曰く今のところに座る。此処の百姓の、家の近く、朝夕汚らわしことにて座れず、宜しく避けて移りて、高山浄境鎮まるべし。

ここに於いて神、ねぎことを聴き給い、ついに、賀比禮の峰に登りその社、石を以て垣と為し云々

薩都河原と名づく、小川あり、みなもと、北山に起こり、南に流れ久渋川に入る云々。

續日本後記に、承和十三年九月丙午、常陸國勳十等薩都神從五位下授云々。

三代実録に、貞觀八年（868）五月二十七日庚午、常陸國勳十等正六以上、薩都神云々並從五位下授云々。

十六年（876）十二月二十九日癸未、常陸國從五位下、薩都神從四位下授云々。

○天之志良波神社

神名帳に久慈郡七座小六座、天之志良波神社あり、小社なり

今なお久慈郡白羽村在り

國誌に、天之志良波神社、財久慈郡蓋し今の白羽村明神うんぬんと見えたり。これ成ること疑いなし

三代実録に、貞觀八年（868）五月二十七日庚午、常陸國正六以上、天之志良羽神云々並從五位下授云々。

十六年（876）十二月二十九日癸未、常陸國從五位下、天之志良羽神云々並從五位上授云々。

從五位下、天之志良羽神云々並從五位上授云々。

古語拾遺に、長白羽神、（伊勢國麻讀祖、今俗いう衣服、これを白羽というはこの縁なり）

麻を植えて、青和幣を作らしむうんぬん見えた

り。この神なるべし。

○天速玉姫命神社

神名帳に久慈郡七座小六座、天速玉姫命神社あり、小社なり

今の世に多賀郡水木村の泉明神この神社なりと言えり、いかがあらん。

國誌に、久慈郡にあり、今その在る所を知らずとあれば、当時早く廢れて、世にも知られずやありけむ。

國誌御撰の時、伝えあらば漏れる事なるべからず。殊に御領内なり。これを速玉姫命といえるは、國誌より後に云いでたるもの成るべし。

さてこの、水久村の泉明神は、大井神社なるべく思ふ由あり、そはそこにいうべし。

さて速玉姫命神社のいづくとも知られずなりたるは、いともいともあさましきことなりかし。

三代実録に貞觀八年（868）五月二十七日庚午、常陸國正六以上、天之速玉神云々並從五下云々。

十六年（876）十二月二十九日癸未、常陸國從五位下、天之速玉神云々並從五位上授云々

○静神社

神名帳に久慈郡大一座静神社大明神あり

國誌に、いま那珂郡に属す。世伝に志津神社これ手力雄命なりと見えたり。

社傳にもしかいえり、

さて今、那珂郡の志津村の志津明神これ也。ちりも久慈郡に近し。

風土記久慈郡条に郡西口里静織里上戸の時綾を織り、この機に知る人有り、このときこの村初めて織る。彼の名を、北に小水あり云々。玉川と名

づく云々。

釈日本紀に、倭文神之問う、この神何処に居ます。先師申して曰く、常陸國座す、これにより、諸祭の幣物の内、倭文は常陸國、祀る所なり云々見えたる。倭文神、即ち静神なるべし。

倭文はシヅとも、シドリともよめり。

さて、和名鈔、久慈郡に倭文郷ありて、静郷なく、風土記同郡に静織里ありて、倭文里無きにて、同署なることを知るべし。

○稲村神社

神名帳に久慈郡七座小六座、稲村神社あり、小社なり

いま茨城郡の磯部村の鎮守神をこえなりといえり。されどこの磯部村は茨城郡の西の方真壁郡によりたれば、久慈郡には真壁郡を隔て遠ければいかがあらん、覚束なし。

今の郡図を見るに、磯部村のあたりを西那珂郡としたり。これは国誌に言える如く東西は一つの郡の中にて言うことにてかく茨城郡を隔てあるべくもあらず。誤りなること著し、

さて、また久慈郡に石部村在り。村に河有り櫻川という。

この地の鎮守神即ち稲村神なりいづれならん。定めがたけれど、國誌に財久慈郡とのみありて今の磯部明神の事なきは、当時は久慈郡に定かにそれと申す神のありしなるべし。

されば石部村の方正しからんが。

三代實録に、元慶二年（878）八月二十三日兵戌、常陸國正六位上稲村神社從五位下を授云々。また、仁和元年（885）五月二十三日丙午、常陸國從五位下稲村神社從五位上を授云々と見えた

り。

○立野神社

神名帳に久慈郡七座小六座、立野神社あり、小社なり。

さていま茨城郡の谷津村の明神これ也といひいかがあらん。

茨城郡は那珂郡を隔てて、通し。國誌にも在久慈郡と有るは、当時定かに在りしなり。

いまそのあとといづくとも知られぬは、嘆かわしき事なりけらし。

三代實録に貞觀一六年（876）五月十一日、戊戌、常陸國立野神云々從五位下云々と見えたり。

神名帳に、伊勢國飯高郡立野神社、尾張國丹波郡立野神社有。

○筑波山神社

神名帳に筑波郡二座大一座小一座筑波山神社、一明神大一座あり

風土記に昔、祖神尊、諸神之処に巡行、駿河國福慈岳に到りてついに日暮れに遇いて宿を請う。

この時福慈神答えて曰く。新粟、初嘗、家内物忌今日の間は異を許すに堪えず、と。ここに祖神尊恨泣して、のりけらく、汝親しく向かい宿からしめず、汝がおる所の山は、この世の極み、冬も夏も、雪霜寒冷、重ねて襲い、人民登らず、飲食をおかじ。

またつくばのタケに登る。宿りを請う。この時筑波の神答え樂。こんや新嘗すれども、遇えず奉らず、尊旨ここに、飲食を設けて。敬い拝み、祭り奉り、茲において祖神喜び賜いて、のりたまわく愛しきかも、わが子高きかも、天地

と共に、日月と共に代々絶えることなく、人民集いて飲食豊富、日々に弥栄千秋万歳、遊樂きわまらずたまいき。ここに、

福慈岳は常にに雪を頂き、登るをえず。その筑波の岳は往き集い歌舞飲喫茲に至るまで絶えずなりと云々。

續日本後記に、承和九年冬十月壬戌、常陸國筑波女神從五位下授云々。

文徳実録に、天安二年（858）夏五月辛酉、朔壬戌、常陸國筑波山神二柱從四位下授云々。

三代實録に、貞觀一二年（870）八月一八日戊申、常陸國筑波男神正四位下、常陸國筑波女神從五位上授云々。

また一三年（871）二月二六日壬寅常陸國正四位下筑波男神從三位授云々。

また一六年（874）十一月六日辛亥常陸國從四位下筑波女神從四位上授云々。

○大井神社

神名帳に那賀郡七座小五座、大井神社あり、小社なり

さていま茨城郡の大淵村の鎮守これ也といえり。これは那珂郡よりはいと遠しいかがあらん

國誌に在那珂とのみあるは、当時は定かに分かりて在りしこと、疑いなし。いまの世にいづくとも確かならぬは、くちおし。

この神社の事、大井郷の条に言える如く、今の水木村の泉明神すなわち大井神社なるべし。その条に、愚考くわしくいえり。

神名帳に、山城國乙訓郡、伊勢國鈴鹿郡、尾張國山田郡、出雲國秋鹿郡丹波國桑田郡などにとともに大井神社有。

○青山神社

神名帳に那賀郡七座小五座青山神社あり小社なり。いま茨城郡の青山村の鎮守神これなりといえり。この青山村のあたりは那珂郡に近し。

國誌に青山神社今属茨城郡とあるこれなり。

○吉田神社

神名帳に那賀郡七座大二座、吉田神社大明神あり。

さて今、茨城郡の吉田村の吉田大神宮これなり。國誌に吉田神社那珂郡にあり、今茨城郡に属すと見えたり。この吉田のあたり、古くは那珂郡にてぞありけらし。

社伝に、祭神、日本武尊なりといえり。

文徳実録に、天安元年（857）五月常陸國從四位下勲八等吉田神社從四位上を授云々。

三代實録に、常陸國從四位下勲八等吉田神社從四位上を授云々。

また元慶二年（878）八月八日辛未、常陸國從四位上勲八等吉田神社正四位下を授云々と見えたり。



【特別企画】

打田昇三の太平記（8） 卷第四・1

太平記原本も巻第四に入るのだが、最初の章段が「笠置囚人死罪流刑：」と景氣の良い話では無いので、お祓い代わりに当時の幕府を支配していた北条氏について「日本外史」や其の他の史料に基づき概略を紹介して置くことにする。

北条氏は石岡にも所縁の深い（平家の始祖である）平貞盛を祖先としている。貞盛の次男・維将は常陸介として石岡に勤務した。其の子・維時が北条を名乗っているから早くから東国に土着して居たのかも知れない。維時の子・直方の娘が、源頼義に嫁して産んだ子が八幡太郎義家である。

北条氏は維時―直方―聖範―時方―時家と続き次の時政の時代に、伊豆に流されて来た源頼朝の監視役を務めた。頼朝は平治の乱に負けて捕らえられ平清盛に斬られるところを、池の禅尼（清盛の継母・頼盛の生母）が助けてくれたのである。

此の役を同時に命じられたのは藤原系の伊東氏であるが、当主の祐親が京都勤務で留守の間に其の長女が監視対象の頼朝と恋をして男児を産んだ。京都から戻って来た祐親は平家を恐れて幼児を谷川に捨てさせ頼朝を殺そうとした。祐親の嫡男が是を逃がし、頼朝は北条氏を頼る。此の出来事が無ければ北条氏が天下を取ることは無かったかも知れない。余談になるが石岡に隣接する旧・志筑藩主の本堂氏（交代寄合・八千五百石）は、谷底に捨てられかけた幼児が祖先と称していた。

話を太平記に戻すと、後醍醐天皇に期待されて笠置城に籠った楠木正成も結局は「衆寡敵せず」

城を攻め落とされてしまう。極言すれば無駄な抵抗で世の中を混乱させ、多くの人命を犠牲にしただけであるから、後醍醐天皇も早く諦めるべきなのだ。世間知らずで自尊心の強い本人は其れに気付かない。それが天皇であったから始末が悪い。こういう人種は現代にも居るとは思うが。

○笠置囚人死罪流刑の事、付藤房卿の事

笠置城が攻め落とされた際に大将の楠木正成はさっさと逃げ出してしまった。捕虜に大物は居無くても幕府の京都事務所では捕えた兵などの処分を決める為に鎌倉との連絡調整に追われていた。

元弘二年正月には鎌倉から工藤次郎左衛門尉と二階堂信濃入道の兩名が処分の決まった逮捕者名簿を持って上洛して来た。六波羅では其れを確認して刑罰を執行するのである。当然だが奈良や京都で幕府への抵抗を示していた公家や武士たちが残らず対象となる。ただし弁護士も居らず幕府側から見た罪の軽重で判決が変わってくるから裁判も公平では無い。疑われた者は即、逮捕⇒判決⇒刑の執行：となり作業は迅速に進められた。

其の方式で最初に首を斬られることになったのは倒幕運動の先手を務めた足助次郎重範であり、公家の萬里小路大納言宣房と二人の息子（藤房と季房）は取り敢えず武士に監禁された。宣房は既に七十歳を過ぎており、後醍醐天皇さえも何処かへ島流しにされると聞いたので、自分も息子二人も助からないと覚悟を決め、嘆きの歌を詠んだ。

「長かれと何思ひけん世の中の
憂（うき）を見するは命なりけり」

歌など詠んでも刑は軽くないけれども此の迷裁判では罪の有無では無く、後醍醐天皇との関

わりで罪の軽重が決まったらしいから、裁判官も判決に苦勞をしないで済んだのである。軽い者でも停職処分か懲戒免職になった。不安なのは判決が保留されて鎌倉へ送られる者である。

後醍醐天皇に謀反を勧めたとされる源中納言具行は、佐々木佐渡判官入道道誉と言う武士が警護に付いて（監視役として）鎌倉へ護送されることになった。親切な人が居て「貴方は途中で斬られる…」と教えてくれたから安心して旅が出来る。途中の名所などを通過するときには歌を詠んだ。

現在の天津市南部に在る相坂の関を越える際に：「帰るべき時しなければ是や此の

行くを限りの相坂の関」

琵琶湖から流れる瀬田川の勢多橋を渡る際に：

「今日のみと思ふ我が身の夢の世を

渡るものかは勢多の長橋

二か所で辞世の歌を詠んだが、かねて「近江の柏原で斬るように：」決められていた事であるから間も無く葬儀社では無くて処刑の見届け役が追い付いて来た。佐々木道誉は中納言の駕籠の前に行き、重い口を開いて宣告をした。

「如何なる前世の宿縁によるのでしようか多くの幕臣の中から此の入道が身柄をお預かりして此処まで参りましたが：今更、この様に申し上げれば情け知らずの様ですが、私に（お助けする）力が有りません。今まで幕府が助命してくれることを期待していたのですが、本日、中納言殿を失い参らせる様に（簡単に言えば斬るように）厳命されました。どうか前世の運命と諦めて下さい：」と言い終わるのもようやくに袖を顔に押し当ててしまった。その言葉に中納言も不覚の涙を流したが、それを袖で拭い万感の思いで答えた。

「：是までの貴殿から受けた御親切は後の世までも忘れません。私などが無事で居られることは、後醍醐天皇さえ島流しにされたのですから、とても無理なことですけれども、生命長らえてお礼をすることが出来ないのが何より残念です：」と言うなり後は物を言わず、形どおりに筆記用具を揃えて貰って静かに辞世の頌（じゅい偈）（げ）：私の徳を称賛する言葉）を書いた。

生死逍遥（せいしにしようようす）

四十二年（しじゆにねん）

山河一革（さんがたびまり）

天地洞然（てんちどうぜん）

日付を元弘二年（一一三三）六月十九日と入れ署名をしてから筆を投げ捨て、座り直した瞬間に斬り手の田児（たご）六郎左衛門尉が後方から太刀を一閃させた。佐々木道誉は涙ながらに遺体を茶毘に付し追善供養を行なったのである。斬られた中納言は、後醍醐天皇が皇太子の頃から近侍していた忠臣であるから、其の最後を天皇が聞いたならば、さぞ落胆されることであろう。

六月二十一日には中納言と同様に、後醍醐帝の側近で有った高僧・殿法印良忠が「簞屋守護人Ⅱかがりやしゆごにん」と言う公設のガードマンに捕らえられた。直ぐに六波羅の幕府出張所へ連行されて奉行の使者である齋藤十郎兵衛が「：天皇でさえも叶わなかった謀反を、貴僧などが思い立つことは無理な話であり、後醍醐帝奪還の為に絵図面などを持ち歩いたのは誠に軽率で不敵な行為であるから罪は重い。捕らえられたからには全てを白状したほうが良いぞ！」と厳しく追及した。良忠は傲然とした態度で「：此の国土は遍く天皇の領土であり、国民の誰もが天皇の民である。

それを幕府が横暴にも冒したのであるから、拘束された天皇に代わって其の無道を懲らしめ、天皇をお救いする計画をしたことが、なぜ罪になるのか？：其の為にあれこれと画策したのは当然のことである。しかし官軍が戦さに負けてしまった今は兵力が減少している。其処で具行卿と相談して綸旨（天皇の命令）を頂き、諸国の兵を募つたのである：」と「それがどうした！」と言う態度で理屈を並べ立てたので、調べる側の印象は良くないが、中には潔い（いさぎよい）と感心する者も居る。其処で現地だけで判決を下さず、鎌倉に報告して意見も聴こう：と言うことになり、身柄は京都駐在の武將・加賀前司に預けられた。

一方では平成輔という公家も川越重重と言う武士に預けられたが鎌倉送りの途中で斬られ、中納言公明と別当実世と言う二人の公家は釈放される：と言われていたが幕府の武士に預けられてから行方不明になった。また尹大納言師賢（いんだいなごん）もろかた・「尹」は長官のこと）は下総国へ流罪となり現地豪族の千葉介に預けられた。都は追われたが環境的には此の大納言が恵まれていたかも知れない。尤も此の人は少年時代から和漢の才（国語学・漢文学の才能）に恵まれ出世には執着しなかったから今回の事件（後醍醐天皇の倒幕運動）にも全く関与していないのだが、なぜか幕府に睨まれてしまったらしい。

かつて唐の国の最盛期（西暦七百年代）に詩人の杜少陵が天寶末の乱（楊貴妃の時代・安祿山の乱）に遭遇して天涯の恨みを吟じ、我が国では歌仙の小野篁（おののたかむら）が隱岐の島に流されて（遣唐副使に任命されたが遣唐使・藤原常嗣の専横を怒ってストライキを起し流罪にされた）其

の時に「わだの原八千島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海女の釣り舟」と釣りする海女に仮託して漂泊の思いを詠じた。是らの先人たちは

悲しまず嘆かずに自分の運命に従ったのである。無実の身で下総へ流された大納言師賢も、悲しむ事無く恨む事無く「出家の望み」を幕府に伝えて許されたけれども、程なく病いに罹り他界した。

後醍醐天皇側近の藤原季房と藤原藤房は常陸国に流された。季房は長沼駿河守に預けられ、藤房は小田民部大輔の預かりとなった。長沼領は小田の西方・小貝川寄りらしい。藤房が筑波山麓の小田に居たことは良く知られている。原文には「左遷遠流の悲は、いずれも劣らぬ涙なれども」と書かれているが、常陸国は恵まれた場所である。中納言藤房には交際していた女性が居て其れが絶世の美女であつたらしく、名は左衛門佐局（さえものすけつぼね）と言う。三年前に宮中の音楽会で見染め、最近になってようやく交際を始めたところ天皇の笠置落ちで急に逢えなくなった。藤房は別れの挨拶に行ったのだが逢うことが出来ず、髪を毛を切つて歌を添えて来た。

「黒髪の乱れん世まで存（ながら）へば

是を今はの形見ともせよ」

外出から戻つた左衛門佐局は当然だが是を見て嘆き悲しんだ。其の後「藤房が常陸国へ流された」と聞き物知りの人物に「どの様な場所か？」を訊ねたところ「常陸の国は山野に猛虎が棲み、浜辺には鯨が押し寄せる」と親切に教えてくれた。嘘も上手につかないと他人を不幸にする。鯨は兎も角として、虎が出没する土地に流されたのでは、とても助からない…と思ひ込んだから、左衛門佐局は悲嘆の余り、藤房が残した歌に、

「書置きて君が玉章（たまずさ）身に添えて後の世までの形見とやせん」

と書き添えた後で、藤房が残した髪を袖に入れ、哀れにも其の身を谷川の淵に投じてしまった。

一方、藤房らと同時に捕らえられた按察大納言は上総国へ、東南院僧正は下総国へ、峯僧正は対馬から長門国へそれぞれに流され、成良親王は但馬国の守護である太田某に預けられたのである。

〇八歳の宮、御歌の事

後醍醐天皇には、なぜか大勢の男児が居たが天皇になれたのは第七皇子（後村上天皇系）である。此処に登場するのは第九皇子で、父親（後醍醐）が隠岐の島に流された時には八歳で中御門中納言

宣明に預けられていたが健気にも「自分だけが都に留まつて居ることは出来ない！」として「自分も天皇の消息が分かる場所へ島流しにして欲しい！」と主張した。周りの者が「（天皇は）島流しでは無く白河に御居になります」と説明したところ「白河は京都に近いと聞く。其処に連れて行け！」とせがむ。困つた中御門中納言は嘘をつく。

「其の昔、能因法師（平安中期の歌人）が“都をば霞とともに出でしかど秋風ぞ吹く白河の関”と詠んだように、白河は道遠く誰も通さぬ関所があります。とても行くことは出来ません！」

此の子は利発であつたから同じ「白河」でも東北と関西とに在ることを知っている。奥州白河は「東路（あずまぢ）の関まで行かぬ白河も日数（ひかず）経ぬれば秋風ぞ吹く」と歌われ、西国の白河は「馴れ馴れて見しは名残の春ぞとも、など白河の花の下陰」と詠まれている。それを隠しているのは教えられない事情がある事と察した。

子供心にも其れ以上は聞かまいと決めたが心は

晴れない。夕暮れ時に中門に立てば遠方の寺から晚鐘の音が聞こえる。：「つくづくと思ひ暮らして入相の鐘を聞くにも君ぞ恋しき」と詠んだ。

此の歌が都の人々に知られると、心の中が顫れた名歌と評判になり、其れを扇や紙に書き付けて「是が八歳の宮の御歌」と持て囃したらしい。

〇一の宮並びに妙法院二品親王の事

此の章段は「元弘二年（一一三三）三月八日、一宮中務卿親王をば、佐々木判官時信を路地の御警護にて、土佐の畑へ流し奉る」という書き出しで始まるのだが、実は其の前日、三月七日には後醍醐天皇が島根県の隠岐の島へ流されている。翌年の二月には釣り船で脱走するから別荘に居たと思えば良いのだが、当時の天皇皇族は忙しい。一宮中務卿親王と言うのは大塔の宮護良親王のことであり、後に小田城で「神皇正統記」を書いた北畠親房には甥に当たると思われる。

護良親王は強気の人物であつたから「都の近くで幕府への抵抗を続けたい」と願つていたので、島流しに遭うと聞いて悔しくてたまらない。その中に幕府の武士が警護と称して大勢で押し掛け、文字通り嚴重に警護して土佐の国へ流した。其れ迄は都の近くならば何か脱出の方便が有る…と期待していたのだが遠国の土佐では話にならない。皇族なので輿に乗せられて行く際に：

「せき留むる柵（しがらみ）ぞ無き泪（涙）河

いかに流るる浮き身なるらん」

と歌を詠んだ。同じ日に護良親王の弟と思われる人物も讃岐国へ流された。昨日は父親の後醍醐天皇が流され今日は兄弟共に親王が流される。流される者同士が相手の事を心配していたのだが土佐も讃岐も四国であるから兵庫の港から船出する。

その機会を利用し、弟は兄に手紙で歌を送った。
「今までは同じ宿（やどり）を尋ね来て

跡無き波と聞くぞ悲しき」

護良親王も返事を歌に託して返した。

「明日よりは跡無き波に迷ふとも

通ふ心よ しるべ（道標）ともなれ」

配所（流刑地）が共に四国であるから、せめて
同国（現在の同県）に……と願ったのだが世の中
甘くはない。護良親王は土佐の幡（高知県南西部）
に送られ、弟は讃岐の詫間（香川県西部）へ行か
された。直線距離でも百六、七十キロは離れてい
るから訪ねて行くことも出来ない。

護良親王は地元の武士・有井三郎左衛門尉の館
近くに仮屋を設けて其処に置かれた。其の地は南
が山際、北が海岸で松林が続く、松の下露が扉に
掛かり無念の涙に混じる。寝ても覚めても波の音
は耳に響き、京の都を忍ぶ夢路も消されるばかり
である。希望を託して都への帰還を願う御祈禱を
現地に着いた其の日から毎日、午前三時に起きて
千日の間も続けたから近所の者は迷惑した。

妙法院は、長井左近大夫将監高廣と言う立派な
名前の武士に警護（監視）され、護良親王とは別
の船で護送されてきたのだが、護良親王が流され
た場所よりも浜辺が近かったようで海風が身体に
沁みる。健康にも良くない上に、浜辺から聞こえ
る漁師たちの声に郷愁を誘われる。

その中に都では、後醍醐天皇を隠岐の国に流す
……ことが決められたのだが、現職の天皇を島流し
にするのは流石に幕府も気が咎めたので、急遽、
後伏見天皇の第一皇子を即位させ後醍醐天皇を先
皇（法皇）にしてから刑務所に送る事とした。

其の為に法皇用の高価な衣装を発注したのだが、

後醍醐さんもしぶとく抵抗して天皇の衣装を脱ご
うとはしなかった。そればかりか、天皇としての
宮中行事を欠かさずに行い、自分が天皇であるこ
とを誇示していた。その為に当時の大日本帝国に
は商売敵の天皇が二人居てそれぞれ本家・家元を
主張していたらしい。国民には迷惑な話である。

○俊明極、参内の事

「俊明極（しゅんみんき）は中国大陸を支配し
ていたモンゴル系王国・元（げん）の著名な禅の
高僧である。後醍醐天皇即位から三年目の元享元
年（一三二一）春に日本へ来た。いくら有名な人
物でも、日本の天皇が異国の僧侶に逢うことは無
かったのだが、後醍醐天皇は「禅宗」に凝ってい
たので「俊明極を宮中に呼んで法話を聞く」と言
い出した。公家たちは反対したが天皇には逆らえ
ないから、警備を厳重にして怪談会方式で法話を
夜に聞くこととした。当日は幽霊のようにローソ
クの灯りに先導された俊明極が宮中に来て、其れ
を天皇以下が紫宸殿に薄明かりで出迎えた。

天皇は更に自分の座に禅師を座らせ、其処で拜礼
の後に香が焚かれ俊明極が万歳を祝した。其の後
で天皇は次のように質問をしたが、相手が中国系
であるから天皇の質問も俊明極の答えも漢文調の
禅問答になる。「山に棧（かけはし）し、海に航（ふ
なはし）して得々として来る。和尚、何を以てか
度生せん？」それに対して俊明極は答える。「仏法
緊要の處を以て度生せん。」天皇は重ねて問う。
「正當懲歴の時（せいとういんものとき）筋道が
不明になった時）は如何？」と、答えて曰く「天
上に星あり、皆北に拱（たく）す。人間水として
東に朝せずと言うこと無し。」其の問答で何が分
かったか知らないが、俊明極は皇居を退出し、天

皇も満足して翌日には公家を勅使として派遣し
「禅師」の称号を与えたのである。禅師は勅使に
「後醍醐帝は武家に苦しめられ玉座を追われても、
やがて再び帝位に戻られるであろう。」と、御世
辞の様に予言したので、幕府の追及を逃れる為に
出家を覚悟していた天皇は、其れを信じて髪を剃
るのを中止しようである。

○中宮御歎き（おなげき）の事

太平記には前章段のような余計な話が入ってい
るので出来事の順が分かり難いのだが、反幕府勢
力が笠置山に籠り、其れを幕府軍が攻略した時点
で後醍醐天皇は捕虜となり翌年に隠岐の島に流さ
れたらしい。元弘二年（一三三二）三月七日のこ
とである。後醍醐天皇には奥さんが数え切れない
ほどいたから（其れだけでも島流しに相当する）
「中宮」皇后宣旨を受けない皇后」と言っても、
どの女性か確定し難いが、此処に登場するのは太
政大臣・藤原実兼の娘（嬉子）と思われる。

天皇が幕府の監視下に置かれていたので公然と面
会は出来ないが、残された中宮は夜に紛れて人力
乗用車を中門に着けたのである。それに気付いた
天皇は、自分で車の窓を開けて面会をした。決ま
り文句だが中宮は天皇の行く末を案じ、天皇は残
る中宮の身を案じて何時までも語り合っていたの
だが、多くの時間は言葉にならず共に涙を流すの
みであった。其のうちに夜明けが近くなり、役人
の目が有るので中宮は帰らなければならぬ。
「此の上の思ひはあらじ、つれなきの

命よさればいつを限りぞ」

と、詠んで涙ながらに車中の人となる。その心の
うちこそ誠に悲しく、廻り合う世の頼み無き哀れ
と言う他は無いのである。（続く）